

1914年 (大正3年)	蚕業試験場と改称 桑樹部、病理部、生理部、 製糸部、化学部を設置	第1次世界大戦はじまる
1915年 (大正4年)	春用蚕品種「日1号×支4号」の 育成(当场育成の最初の品種で以 後20年にわたり広く用いられ た)。	生糸輸出:17万8千俵 桑園面積:45万ha 収繭量:176万4千t
1918年 (大正7年)		我が国においてレーヨン糸の 生産開始 第一次大戦終わる
1921年 (大正10年)	雌雄鑑別法確立	
1923年 (大正12年)		関東大震災
1924年 (大正13年)	人工孵化法確立 これにより、年間を通じて、随時、 孵化が可能となり、特に夏秋蚕 の普及に役立った。	
1927年 (昭和2年)	蚕糸局官制公布	浅草―上野間が開業 (日本初の地下鉄)
1929年 (昭和4年)	世界的経済恐慌、滞貨生糸10万 俵生じ、財政措置が講ぜられた	世界大恐慌
1930年 (昭和5年)	繭生産のピーク 繊度感知器の開発	生糸輸出:47万7千俵 桑園面積:70万8千ha 養蚕戸数:220万8千戸 収繭量:39万9千t

年 表

年 次	蚕 昆 研	社 会 情 勢 等
1886年 (明治19年)		繭生産量:2万9千700t 生糸生産量:4万4千900t
1888年 (明治21年)		繭生産量:3万3千300t 生糸生産量:4万6千600t
1892年 (明治25年)		桑園面積:25万4千800t 繭生産量:5万5千500t 生糸生産量:7万900t 生糸輸出量:5万300俵 (72.5%)
1909年 (明治40年)		桑園面積:38万800ha 繭生産量:12万600t 生糸生産量:15万3千300俵 生糸輸出量:9万3千300俵
1911年 (明治44年)	原蚕種製造所創立(農林省所管) 本所:東京 支所:綾部・前橋・福島	生糸輸出:14万5千俵 桑園面積:45万ha 収繭量:16万t
1912年 (明治45年)	松本支所設置 好調な生糸輸出を支えるための 夏秋蚕の普及	桑園面積:44万9千800ha 繭生産量:16万6千900t 生糸生産量:22万7千800俵 生糸輸出量:17万1千俵 英国の豪華客船タイタニック号 が処女航海で沈没
1913年 (大正2年)	一宮・熊本支所設置	遺伝子の連鎖現象発見

(昭和 15 年)	繭検定規則公布 強制検定制度施行	
1941 年 (昭和 16 年)		日本蚕系統制株式会社 初めて空襲される
1945 年 (昭和 20 年)	政府が桑園 14 万 8 千 700ha 減反指示 GHQ の覚え書きにより、政府は桑園減反中止を都府県に指示 沖縄・台湾両試育所 廃止 蚕糸業法公布	東京大空襲 原爆投下 ポツダム宣言受諾、敗戦 桑園面積：24 万 ha 養蚕戸数：100 万 4 千戸 収繭量：8 万 5 千 t
1946 年 (昭和 21 年)	生糸輸出の再開（横浜） 農林省に蚕糸調査会設置	蚕糸業復興 5 カ年計画 輸入食料の見返りとして繭増産の方針決定
1947 年 (昭和 22 年)	蚕業技術所の設置に関する通達 四国試育所を設置 岡谷製糸試験所を設置	日本国憲法公布（11 月 3 日） 桑園面積：17 万 ha 繭生産量：5 万 3 千 500 t 生糸生産量：11
1948 年 (昭和 23 年)	山川試育所を設置 飯坂支場を福島支場に合併 第 7 次国際養蚕会議および第 1 回絹会議フランスにおいて開催 全国養蚕販売農業協同組合設立	世界人権宣言

		日本蚕糸学会創立
1931 年 (昭和 6 年)	小淵沢・沖縄飼育所の設置 萎縮病：接木伝染、ヒシモンヨコバイによる媒介 平飼条桑育 繭検定法確立 落繭感知器 自動操糸機（張力式）	米価の大暴落 満州事変 農家戸数：205 万 7 千 300 戸 桑園面積：64 万 6 千 400 ha 繭生産量：33 万 5 千 600 t 生糸生産量：69 万 3 千 200 俵 生糸輸出量：58 万 2 千 200 俵
1932 年 (昭和 7 年)	製糸業法公布	5・15 事件 桜田門事件 農家戸数：205 万 7 千 300 戸 桑園面積：64 万 6 千 400 ha 繭生産量：33 万
1934 年 (昭和 9 年)	原産種管理法公布 蚕業試験場官制の改正 明石支場・宮崎支場・新庄・飯坂出張所・台湾飼育所の設置	室戸台風 生糸輸出：55 万 7 千俵 桑園面積：61 万 7 千 ha 養蚕戸数：198 万 8 千戸 繭生産量：32 万 7 千 t
1937 年 (昭和 12 年)	蚕糸試験場と改称 製糸および絹繊維に関する研究の充実をはかる。 一宮桑園を廃止して、武豊支場をおく	「絹絲化学」（金子英雄著）
1938 年 (昭和 13 年)	原産種管理法に基づき原原蚕種配布開始	米国デュポン社、ナイロン発表
1940 年		

1959年 (昭和34年)	肥料・病理の各研究室の設置 年間条桑育指導地設置事業開始 蚕糸白書を発表	「増補 山繭養法秘傳抄注解」 (中嶋福雄編著) 伊勢湾台風
1960年 (昭和35年)	生糸需給、世界的に好転し、滞貨 生糸放出 カイコの人工飼料開発	日米安保条約改定 デモ隊国会に突入し、 東大生樺美智子さん死亡 生糸輸出：8万8千俵 桑園面積：16万6千ha 養蚕戸数：64万6千戸 収繭量：11万1千t
1961年 (昭和36年)	農業基本法公布	
1962年 (昭和37年)	第一次農業構造改善事業開始 第一次農業構造改善 養蚕が入っている実施地域 478 地域 桑園造成改良 603 カ所 稚蚕共同飼育所 526 カ所 壮蚕共同飼育所 423 カ所	キューバ危機
1963年 (昭和38年)		ケネディ大統領暗殺
1964年 (昭和39年)	生糸の国内需要拡大はじまる	東京オリンピック 東海道新幹線開業 「近代養蚕」(大村清之助著) 「絹糸蛋白質 蛋白質化学5」 (赤堀・水島編 清水正徳・福 田紀文・桐村二郎著)

1949年 (昭和24年)	蚕糸局に技術改良課設置 小千谷桑園を設置	北大西洋条約機構成立 国際絹業協会(リヨン市)創立 「新しい養蚕の原理」 (室賀兵左衛門著)
1950年 (昭和25年)	農業関係試験研究機関の整備統合 山川試育所屋久島分場を設置 職員数 949 名	朝鮮戦争ぼっ発 中華人民共和国成立
1951年 (昭和26年)	繭糸価格安定法公布	サンフランシスコ講話条約 日米安全保障条約調印
1952年 (昭和27年)	蚕糸式織度感知装置の開発	「養蚕学概要」(有賀久雄著)
1953年 (昭和28年)	組織改変(蚕種部が育種部と改称)	「家蚕遺伝学」(田中義麿編著)
1956年 (昭和31年)	農林水産技術会議設置	「改訂版 総合養蚕学」 (横山忠雄監修)
1957年 (昭和32年)	蚕糸業振興審議会設置	「絹糸の構造」(伊藤武男監修) スプートニク打ち上げ
1958年 (昭和33年)	繭糸価格安定に関する臨時措置法 買い上げ10万俵に達す 機構整備 (農林水産省組織規定改正) 技術連絡室・絹繊維部新設、 指導試験部を養蚕部に改組、前橋 ・武豊・明石支場、四国・山川試 廃止 東北・中部・関西・九州の4支場 に裁桑・養蚕・蚕品種改良・土壌	皇太子殿下、正田美智子さんと ご結婚 東京タワー完成

1971年 (昭和46年)	米の生産調整、稲作転換対策として、桑園への転換が始まる。 (目標5カ年間に1万5千ha)	我が国の生糸自給率80.2%
1972年 (昭和47年)	生糸輸入の規制条項定まる 小淵沢原産種試験所の廃止 蚕品種保存、人工飼料育、農薬残留の3研究室の新設 蚕糸園芸局を廃止して、農蚕園芸局設置 生糸需要の著増、生糸輸入量の増加	日中共同声明で国交正常化 沖縄返還 生糸輸出：1,242俵 桑園面積：16万3千ha 養蚕戸数：39万戸 ウォーターゲート事件
1973年 (昭和48年)		オイルショック
1974年 (昭和49年)	稚蚕人工飼料育実証事業開始 生糸一元輸入措置の実施	長島茂雄引退
1975年 (昭和50年)	職員数644名	ベトナム戦争終結 生糸検査規則(昭和48年農林省令第45号) 世界的な生糸・絹過剰基調 「図解 手織りのすべて」 (村野圭市著)
1976年 (昭和51年)	桑品種「ゆきしらず」 「みなみさかり」育成 生糸の一元輸入措置を当分の間、	桑園面積：15万1千ha 養蚕戸数：24万8千戸 収穫量：9万1千t

1965年 (昭和40年)	職員数841名	生糸輸出：1万7千俵 桑園面積：16万4千ha 養蚕戸数：51万4千戸 収穫量：10万6千t ベトナム戦争
1966年 (昭和41年)	限性蚕品種「日131号×支131号」育成 日本蚕糸事業団法公布	中国文化大革命
1967年 (昭和42年)	生糸の輸入、輸出額を上回る 和装ブームと共に生糸の消費は急激に高まる	
1968年 (昭和43年)	蚕糸園芸局設置 関税一括引き下げ協定による生糸・絹織物の関税第一回引き下げ	川端康成、ノーベル文学賞 東名高速道路全通
1969年 (昭和44年)	生糸の国内需要量40万俵、前年10%増となる 生糸・絹織物・副蚕糸・野蚕糸等蚕糸類の通関輸入額329億円に達する。	月着陸船アポロ11号 (32人乗り人類初の月世界到達成功、月の岩石を持ち帰る)
1970年 (昭和45年)	高松宮殿下、常陸宮殿下・華子妃殿下行啓 桑品種「しんいちのせ」育成 「総合農政の基本的方向」決定	日本万国博覧会開催(大阪) 三島由紀夫自殺

1984年 (昭和59年)	農林試験研究機関の大幅な組織再編 蚕糸試験場の縮小再編 (1室5部1支場40研究室) 農業生物資源研究所、農業環境技術研究所の新設		行うことを内容とする繭糸価格安定法の一部改正	「昆虫超微形態学」「昆虫の表面構造」(赤井弘著)
	第17回国際昆虫学会議 (ドイツ・ハンブルグ)	ロサンゼルス・オリンピック	1977年 (昭和52年) 稚蚕人工飼料育パイロット事業開始	王貞治、国民栄誉賞第一号受賞
	繭の生産調整が行われた		1979年 (昭和54年) 筑波移転 職員数559名	「総合蚕糸学」「蚕糸学用語辞典」(日本蚕糸学会編)
1985年 (昭和60年)	皇太子殿下、美智子妃殿下行啓 蚕品種「日148号・中149号×中148号・中149号」育成	「カイコはなぜ繭をつくるか」 (伊藤智夫著) つくば科学万博 日本航空123便墜落事故	1980年 (昭和55年) 岡谷製糸試験所の廃止 蚕糸業法に基づく稚蚕人工飼料育用蚕品種の指定制度発足	東京サミット開催 生糸検査所(横浜、神戸)が農林規格検査所に吸合
1986年 (昭和61年)	広食性蚕品種「あさぎり」育成 桑品種「おおゆたか」育成 「ハイブリッドシルク」開発	伊豆大島大噴火 チェルノブイリ原発事故 野蚕研究会設立	日本蚕糸事業団の生糸の在庫量が14万俵を越える 第16回国際昆虫学会議(京都、参加者2,259名)	「続絹糸の構造」(北條舒正編) モスクワ・オリンピック
1987年 (昭和62年)	細繊維度蚕品種「あけぼの」 多収蚕品種「大鷲」育成 広食性の蚕育成	「絹繊維の加工技術とその応用」 (加藤弘著)	1981年 (昭和56年) 桑品種「しんけんもち」 「ときゆたか」 「はやてさかり」育成 創立70周年記念式典	桑園面積:12万1千ha 養蚕戸数:16万6千戸 収繭量:7万3千t 「昆虫学最近の進歩」 (石井象二郎編)
1988年 (昭和63年)	蚕糸・昆虫農業技術研究所発足 (1室6部1支所) 昆虫研究分野の対応として 生体情報部新設		1982年 (昭和57年) 養蚕生産者団体による繭の自主的計画生産 1983年 (昭和58年) 桑品種「あおばねずみ」育成 蚕糸砂糖類価格安定事業団の生糸在庫量17万俵を越えた	大韓航空機撃墜 「蚕の栄養と人工飼料」 (伊藤智夫著)

1994年 (平成6年)	第2回国際野蚕学会議 (長野県・穂高町)	「530億匹の闘い ウリミバ エ根絶の歴史」(小山重郎著)
	ISF'94(繊維学会国際シンポジ ウム、横浜) 外国人研究者 Leal, Walter Soares 研究室長昇任	「一色一生」(志村ふくみ) 「シルクの科学」朝倉書店
1995年 (平成7年)		阪神大震災 日本野蚕学会に名称変更 <i>Int.J. Wild Silkmoth & Silk</i> 創刊
1996年 (平成8年)	組織再編 上席研究官、機能開発部新設 蚕糸関係3研究チーム改組 科学技術振興調整費による COE 育成機関に選定される。 第20回国際昆虫学会議 (イタリア・フィレンツェ) 創立85周年合同OB会開催	アトランタ・オリンピック
1997年 (平成9年)	第3回アジア・太平洋昆虫学会議 (台湾・台中市)	「昆虫利用科学シリーズ 全8巻」(日本蚕糸学会編) 「昆虫機能利用学」 (鈴木幸一ら、8名共著) ダイアナ妃死亡
1998年 (平成10年)	第42回日本応用動物昆虫学会 (名古屋大) 第3回国際野蚕学会議 (インド・ブバネシュワール)	臓器移植 「自然の中の人間シリーズ 昆虫と人間編 全10巻」 (梅谷献二編)

1988年 (平成元年)	第18回国際昆虫学会議 (カナダ・バンクーバー)	ソウル・オリンピック
1989年 (平成2年)	太織度蚕品種「さきがけ」育成	「革新養蚕のための技術戦略」 (堀江保宏編著) 天安門事件 ベルリンの壁崩壊 東西ドイツの統一
1990年 (平成3年)	タイ王国・シリントーン王女来所 桑品種「たちみどり」育成 第1回国際野蚕学会議 (中国・瀋陽)	「天蚕-Science & Technology」 (赤井弘・栗林茂治共編)
1991年 (平成4年)	広食性蚕品種「しんあさぎり」 太織度蚕品種「ありあけ」 細織度繭蚕品種「しんあけぼの」 育成	長崎県雲仙岳火砕流 湾岸戦争ぼっ発 蚕糸学入門(日本蚕糸学会編)
1992年 (平成5年)	第19回国際昆虫学会議 (中国・北京)	バルセロナ・オリンピック 製糸絹研究会誌創刊
1993年 (平成6年)	常陸宮殿下・華子妃殿下行啓 技会プロジェクト「昆虫機能」	低温異常気象による米の大凶作 北海道南西沖地震(奥尻島) 「シルクのはなし」 (小林勝利・鳥山國士編著)

1999年 (平成11年) 2000年 (平成12年) 4月 6月 8月 9月 10月 11月 12月	第43回日本応用動物昆虫学会 (琉球大学) 第50回日本蚕糸学会関東支部大会 (蚕昆研) 第70回日本蚕糸学会(東大) 日本植物病理学会(岡山大学) 第6回日本野蚕学会(上田・信大) 第21回国際昆虫学会議 (ブラジル・イグアス) キッチン・キトサン研究会 (山口大学) 第73回日本生化学会(横浜) 第210回日本作物学会講演会 (宮崎大学) 第51回日本蚕糸学会関東支部大会 (群馬県) 第47回製糸絹研究学術講演会 (新宿・蚕糸科学研究所)	「アジアの昆虫資源」 (松香光夫・栗林茂治・梅谷献二著) 「そだててあそぼう カイコの絵本」(木内信編) 介護保険制度スタート 沖縄サミット 伊豆諸島火山活動 雪印食中毒事件 ロシア原潜沈没 シドニー・オリンピック 人事勧告でつくば市が3%調整 手当支給地域に指定 製糸絹研究会、日本シルク学会 に名称変更
2001年 (平成13年) 3月 4月 7月 8月	第71回日本蚕糸学会(蚕昆研) 独立行政法人農業生物資源研究所 発足 動生研・植生研・遺伝資源の3部門 構成 第45回日本応用動物昆虫学会 (島根大学) 第38回 IUPAC Congress (豪州・ブレスペーン) 第4回アジア・太平洋昆虫学会議 (マレーシア・クアラルンプール)	21世紀のはじまり